

「高等学校における進路指導の在り方に関する調査研究」

事業実施報告書

団体名 (宮 城 県)

1 事業の実施期間 平成22年9月1日から平成23年3月31日

2 調査研究の実績

(1) 調査研究のテーマ

テーマ：社会的・職業的自立へ向けた「志教育」の推進
～普通科高等学校における学校教育と社会との円滑な接続を目指して～

【仙台向山高等学校】

1 学校の概要

(1) 学校の概要

全日制課程普通科仙台南学区初の男女共学高校として昭和50年に創立され、本年36周年を迎えている。平成5年度には理数科が設置され、現在、普通科4学級理数科1学級の全5学級、本年度在籍は600名（男子295名、女子305名）である。

校訓を「自律・和敬」、教育方針を「自らを律し、はるかな理想を目指し、無限に向上せんとする志を持ち、他を思いやり協力する豊かな心を持ち続けること」とし、開学以来の自由な服装と一人一人の自覚と責任を重んずる清新な校風が伝統的に培われ、8000人を越える人材を輩出してきている。

基本的目標を、高品質授業の提供による学力向上、系統的な進路指導による進学希望の実現、自律心の育成を通して高い品格を備えた人間の育成とし取り組んできている。

これらの具現化のため、学力向上に向け、1単位時間45分週35コマの授業と少人数指導の充実により、分かるまで学び抜く親身な指導を充実させ、さらに土曜学習、放課後や長期休業中の課外など、生徒の学校での学習時間や教員の学習指導の機会を十分に確保してきている。

(2) これまでの進路指導における取組

希望進路の実現に向けては、平成10年度から現在に至るまで、総合的な学習の時間において、自らの生き方・在り方を問いかけながら希望進路への意識付けを図る目的で、進路学習を展開している。これらの教育活動を総称し、「向陵プラン」と呼んでいる。この向陵プランによって、将来の進路を切り拓く「たくましい学力」を育むとともに、自ら将来や今の自分とこれからの学びや社会との関わりを探求し理解を深めることで、「自分と学問や社会とのつながり」を自覚させ、主体的進路選択を促すことでよりよい進路実現を図ってきている。具体には、「向陵セミナー」として、各学問分野から大学・企業等の招聘講師による講座を受講させ、進路意識を高め職業観の育成を図った。その他、「訪問学習」として、大学訪問・体験や研究機関や法律事務所などへの職場訪問、さらに、進路講演会にも取り組んだ。しかし、こうした取り組みに対して、短期的な事前および事後指導のみならず、長期的な視点に立った事前および事後指導の観点として、3年間を見通した体系的な視点が不足しているのではないかと、アウトプット評価に終始して、各段階における生徒の変容をしっかりと把握できるアウトカム評価ができていないのではないかと、といった指摘がなされるようになってきた。

(3) 向陵基本プロジェクトの提示と取組

こうした状況において、平成22年度において本校では、今後の本校教育活動の充実とより一層の推進を図っていくうえでの基本的指針を、三つの基本目標で構成し提示した。

①基本目標「豊かな実践で主体的に深く学ぶ力(考察力)」を育む

目標実現に向け、生徒には、能動的に学び、伝え、活かそうとすることを大切にさせる。学校は、過程や活動重視の学習を計画的に組み立て、「豊かな体験と確かな実践に重きを置いた課題解決型の探求学習」において質の向上を図るなかで、校内での実践研究の機会を充実させ教員の共同研究力を高める。

②基本目標「創造的な学びで将来の希望を実現する力(実現力)」を育む

目標実現に向け、生徒には、自分を深め、啓き、実現していくことを大切にさせ、学校は、日常学習と総合化した探求的キャリア発達活動を組み立て、生徒の希望実現を確

実なものにする。

これらの取組をより推進するため、「学習指導と進路指導を密接に連動させた特色ある進路シラバスの研究・開発」することを通して、校内の連携力を高めることで成果の安定化を図っていく。

③基本目標「心に響くコミュニケーションで踏み出す力（前進力）」を育む

目標実現に向け、生徒には、自分を大切に、関わり合う力を高め、一歩前に踏み出す行動を大切にさせる。学校は、ガイダンスとコンサルテーションの機能をチームワークで組み立て、安心して学びに専念し生き抜く力が培っていく。

以上3つの観点から、「生徒一人ひとりに対して、それぞれにふさわしい自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ね、いわゆる「キャリア」を形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てるキャリア教育との間に強い関係性を有しているといえる。つまり、キャリア教育の目指す、人間関係形成・社会形成能力、自己理解・自己管理能力、課題対応能力、キャリアプランニング能力の育成、総じて、基礎的・汎用的能力の育成と本校が掲げる教育の基本指針と強い関連性を持つものであり、中核となるものであるといえる。

2 調査研究の実績

(1) 調査研究のテーマ

普通科進学校におけるキャリア教育の充実に向けての方策

～向山版キャリア教育の推進～

本校の生徒は、ほとんどが四年制国公立大学への進学を目標に入学してくる。その目標を達成させることが本校の大きな使命の一つである。しかし、単に希望進路の達成を支援するだけではなく、生徒一人ひとりのキャリア発達を支援し、それぞれが自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていくキャリア教育の充実も必要である。本校がキャリア教育によって育成しようとしている生徒像は、次のようなものである。

- ① 大学で学ぶ意義を十分理解し、目的を持って「入りたい」大学や学部・学科を選択するために高校段階における興味関心をもとに、適性を踏まえた「学び」を模索する生徒
- ② 発表活動や調べ学習などの諸活動を通して、コミュニケーション能力や表現力、さらには論理的思考力を持った生徒
- ③ 社会における役割を認識し、高い自己肯定感を有した生徒

このことを踏まえて、具体的には次のような調査研究を実施する。

- ① 平成10年度より、宮城県の指定事業等を通じて、総合的な学習の時間、いわゆる「向陵プラン」に先進的に取り組んできた。近年の生徒の実態や大学・社会の変化を踏まえ、「向陵プラン」をバージョンアップしていくためにはどのような方策が考えられるか。
- ② 普通科進学校におけるインターンシップの具体化としての「アカデミック＝インターンシップ」（長期休業等を利用した生徒の大学における研究体験）実施に向けた調査研究の実施。
- ③ 中学校でのキャリア教育と高等学校におけるキャリア教育を接続し、より充実したキャリア教育を提供するためのするためのポートフォリオ（中学校・高等学校を通じたすべての体験・学習の綴り込み作成）作成に向けての調査研究の実施。

(2) 調査研究の内容

a. 向陵プランの深化に向けた取組について

向陵プランとは

「見通しをもって選び、主体的に自己実現する力」を育てるための活動であり、仙南向山高校における進路学習の中心であり、キャリア教育の中心である。それは、単に大学に合格することを目的とした進路学習ではなく、将来を見据えた学びを模索する中で、生徒一人ひとりが「自分らしい生き方・あり方」を考え、実践する場である。

「つながる」3年間を合い言葉に、何が学べるのかを調べ、何を学びたいかを考え、どこで学べるかを知るといった諸活動を通して、「これこそ自分がやりたかったことだ！」と思える「何か」を生徒は探し出すのである。

b. 生徒の現状把握を目指したポートフォリオの導入に向けた調査研究

もともとポートフォリオ (portfolio) は「紙ばさみ」を意味する英語で、持ち運びができるように書類を入れる「もの」、一般には「書類カバン」などをいう。転じて、教育においてはこれまでの自分が重ねてきた履歴をファイリングしたものを呼ぶ。つまり、それはひとりの人間が、学びのプロセスで生み出す「学習成果」として、文章・絵・作品・返却されたテスト用紙・調べ学習の情報メモや新聞の切り抜き等を一元的にファイルすることが基本となる。ポートフォリオとは、これまでの自分の記録であり、つまりは蓄積された自分自身である。

c. アクティブなキャリア教育を目指したアカデミックインターンシップの導入に向けた調査研究

導入の背景

大学という学びの最先端で、研究活動や探求活動を実感することで、自らの希望する学問分野に対して、より一層の興味関心を抱くとともに、高校における普通の学習活動への主体的な取り組みが期待できる。こうしたためあてを達成するための新たな取組として、大学におけるインターンシップとして「アカデミックインターンシップ」を執り行うこととした。インターンシップは通常在学中の就業体験を指す言葉である。しかし、本校では、大学を舞台とした研究体験という意味でのインターンシップを実践することによって、生徒一人一人の主体的な進路意識の高まりを期待した。これまで東北大学の教育学部や宮城大学や山形大学などに視察・調査を行い、各大学からは概ね好意を持って受け入れられていた。今後は、実現に向けてさらに詳細を詰めていきたい。

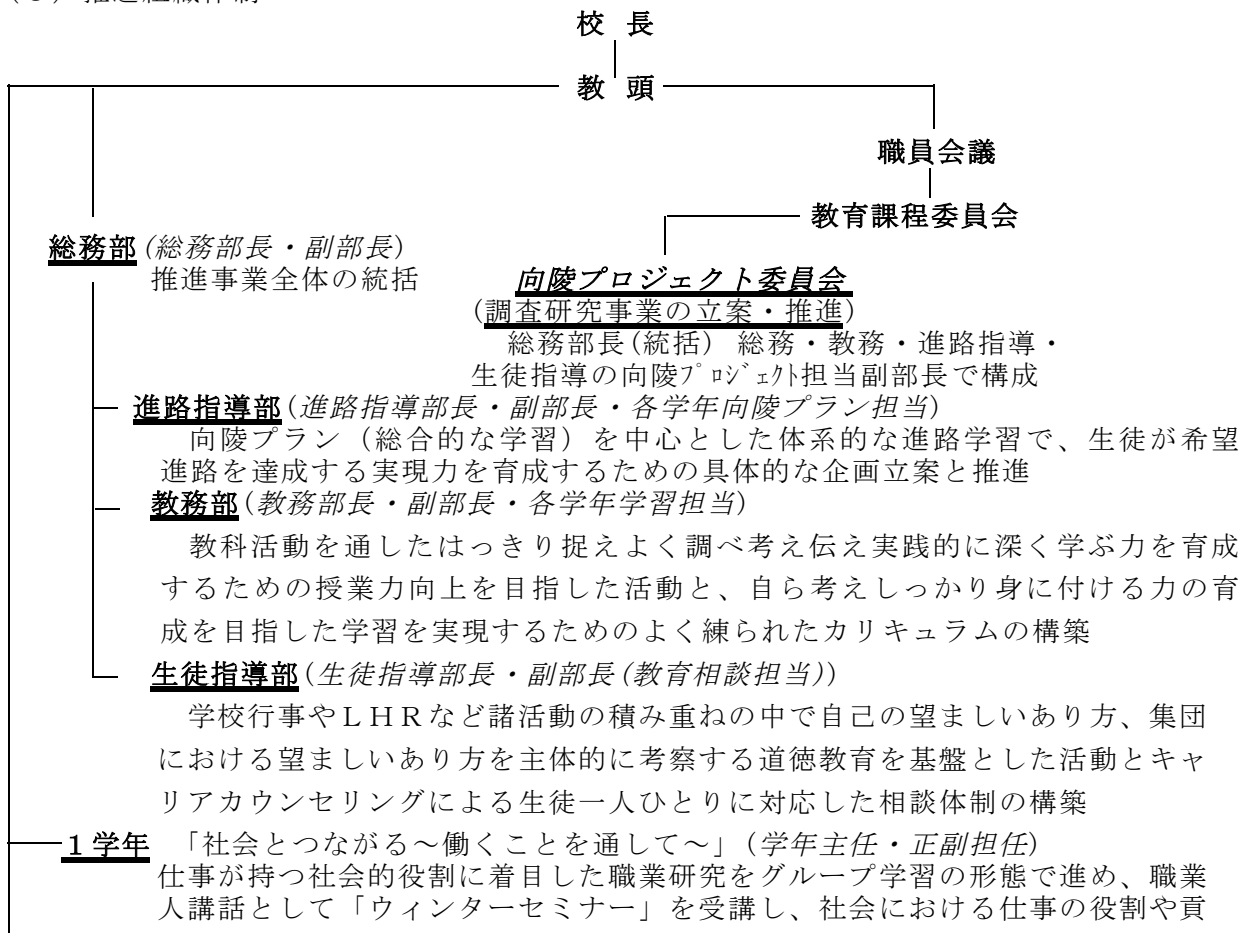
d. 大学視察の実施

概要について

向陵プロジェクト基本計画に基づき、進路の実現力の向上にねらう本校の取組「向陵プラン」と日々の進路相談の充実に資するため、各大学の情報や状況について、教員自らが現地で直接に研究内容や教育活動等の見聞を深め、その理解と情報の校内共有と進路指導の効果性を高めようとするものであり、さらに、後の、生徒の大学での教育・研究活動に係る「アカデミックインターンシップ」の計画・立案のための事前調査でもある。

これまでの進路指導の取組の捉え直しから、大学選択の指導・助言に際し、刻々と進歩かつ変容する大学教育の現況把握には、書誌情報等の二次情報、さらに、教員の経験等に依らざるを得ないことがみえてきていた。かと言って、直接、すべての教職員が大学に直接出向き、理解を深め、指導・助言並びに支援の糧とすることは、極めて困難である。さらに、可能にしても、多くの時間と費用を要し、適時性の確保は困難である。そこで、予め、聴取・視察のねらいと内容等を計画的の準備し、そのまとめの校内共有化を意図することにより、毎年数名の教員派遣によって効果的に、所期の目的を達成できるものと考えられる。さらに、この一連の取り組みはキャリア教育の一環として実現力の向上に資するものとして綿密にアシストするための方策の一つであり、大学で学ぶことの意義を見つけ、また学びそのものに対する興味・関心および意欲を喚起し、目的を持って大学を選択する生徒を育てることにつながるものである。

(3) 推進組織体制



献を認識する。

——**2 学年** 「学問とつながる～大学を通して～」(学年主任・正副担任)

学問分野を調べ、それが設置している在仙の大学に対して、夏季休業中3日程度のアカデミックインターンシップを行う。その後、秋に大学講師を招いた「向陵セミナー」を実施する。

進路学習の集大成として、生徒ごとに「志望理由書」を作成させる。

——**3 学年** 「自分とつながる～課題研究を通して～」(学年主任・正副担任)

共通する学問分野についての最先端の状況やトピックスなどをテーマとして、大学の協力を得ながら通年を通してグループで課題学習を行うことによって、各生徒の進路意識およびキャリア意識を深く考察させる。

(4) 実施日程

時 期	活 動 の 具 体 的 内 容	備 考
9月13日	3年サクセスタイトム報告会(向陵プラン) ※志望する学問分野の最先端の研究や社会との具体的な関わりを研究し、グループ毎に発表した。 この結果を最終的な進路選択に活かした 2年オープンキャンパス報告会(向陵プラン) ※夏季休業中に各自で参加した大学のオープンキャンパスの内容や訪問先の大学について調べたことをグループ毎に報告した。この成果を2学年後半の志望理由書作成につなげた。	
9月29日	1、2年学習状況調査及び生徒による授業評価の実施 ※年度前半を終了した時点で、生徒が学習状況を自己評価することで、生徒自身が今後の目標をしっかりと掲げる。また、生徒による授業評価を実施することで、学力向上に向けてよりよい授業を実施し、豊かな学びにつなげた。	
10月4日	3年ケーススタディ(～12月) ※これまでの大学・学部研究を中心としたキャリア学習を、最終的な出願先決定につなげた。	
10月18日	授業公開 ①公民科から提供された教材をもとにしたLHR(特別活動)における1学年の道徳の授業の公開 ②向陵プランにおける3学年のサクセスタイトムのグループ発表の公開 ③情報交換会における体育科からの実践報告 ※県内から県教委指導主事・中学校校長もふくむ13名の先生方の参加を得て、本校の取り組みについて活発な意見交換を行い、この外部的評価を、今後の取組の参考とした。	
10月27日	1、2年向陵セミナー ※県内外の14名の大学教官を招いて、学問と社会の関連を中心に講話をきいた聞いた。この成果から1年生は社会研究、2年生は志望理由書作成へとすすめた。	
10月29日	学校評価(生徒・保護者・教員) ※学校評価の項目に本校のキャリア教育への評価を含めた。その結果おおむね本校のキャリア教育への取組が高い評価を得た。	
11月17日	県キャリア発達段階調査・県卒業生追跡調査実施	
11月24日	大学訪問I実施 ※東北地区の同系統の学部を訪問することによって各大学による特徴を把握して生徒の進路選択に活かした。 今後本校で実施を予定しているアカデミック＝インターンシップ(生徒が大学訪問して研究を体験)に	

	<p>ついでに協議を各大学と行い、計画の具体化に活かした。</p> <p>大学視察①弘前大学農学生命学部 教諭2名、キャリアアドバイザー1名</p> <p>11月25日 大学訪問②山形大学農学部 教諭2名</p> <p>11月29日 大学訪問③宮城大学食産業学部 教諭3名</p> <p>12月17日 第2回現職教育研修会 ※6月に実施した第1回は進路指導部を中心としたキャリア教育の視点からのものであったため、第2回は授業力向上を中心とした教務部、教育相談を中心とした生徒指導部の視点からキャリア教育の研修を行った。</p> <p>1月24日 1学年社会研究発表会（向陵プラン） ※自身の興味ある学問分野と社会のつながりを中心に、大学等の機関を訪問して行ったグループ学習の成果を発表。</p> <p>2月3日 1学年ウインターセミナー ※NPO法人ハーベストの協力を得て、24名の社会人講師を招き、自分の興味ある職業と社会がどのようにつながっているか知ることによって自分と社会とのつながりの意識をさらに深めた。</p> <p>2月22日 2学年志望理由書作成（向陵プラン～3月） ※2年間の向陵プランのまとめとして現段階の志望先に関する志望理由書を作成</p> <p>大学訪問Ⅱ実施 ※東北地区の同系統の学部を訪問することによって各大学による特徴を把握して生徒の進路選択に活かした。 今後本校で実施を予定しているアカデミック＝インターンシップについての協議を各大学と行い、計画の具体化に活かした。</p> <p>大学視察①岩手大学農学部 教諭2名</p> <p>3月2日 大学訪問②秋田県立大学 教諭2名、キャリアアドバイザー1名</p> <p>進路指導総合推進事業報告会参加 ※宮城県教育委員会主催の報告会に、1学年生徒7名が参加して社会研究の成果を発表。教諭1名が指導について発表。</p> <p>3月3日～5日 大学訪問Ⅲ実施 ※ポートフォリオ（中学・高校を通じての生徒各自の体験を記録として集積する）にむけての先進校視察を実施し、その準備に活かした。</p> <p>大学訪問③金沢工業大学 教諭3名教員大学訪問</p>
--	--

(5) 調査研究の成果

a. 調査研究により得られた効果

ア) 向陵プランの深化に向けた取組について

1) 向陵プランが目指すものの明確化：

「見通しをもって選び、主体的に自己実現する力」の具現化

- 大学で学ぶ意義を十分理解し、目的を持って「入りたい」大学や学部・学科を選択する力
- 高校段階における興味関心をもとに、適性を踏まえた「学び」を模索する力
- 発表活動や調べ学習などの諸活動を通して獲得する、コミュニケーションする力や表現する力、論理的に思考する力
- 社会における自らの役割を認識し、自己を肯定する力

2) 向陵プランのテーマの明示：「つながる3年間」

- 3) キャリア教育の根幹としての向陵プランについて、3年間を見通したプログラムの提示



向陵プラン模式図

- 1年次：「社会とつながる～働くことを通して～」
- 【前半：学問基礎研究から「向陵セミナー（大学出前講座）」の受講】
- ◎ 文理選択をより実情に即したものにするために、興味関心のある学問分野について、その内容を調べる。ただし、学問分野は詳細なものではなく、学部レベルの調査とする。
 - ◎ 自らの興味関心に基づいて選択した講座を受講する。その後、講座ごとにグループを形成し、それぞれの分野ごとに事後学習を展開する。
- 【生徒の変容】
- こうした活動を通して生徒は、自らがどのような学問分野に興味関心があるのかを考えるようになる。さらに、自分の興味関心のある学問分野についての知識を増やすとともに、同じ分野を希望する他生徒と共に学習することで、進路意識を相互に高めることになる。
- 【後半：社会問題研究から「ウィンターセミナー（社会人講話）」の受講】
- ◎ 上記グループにおいて興味関心のある学問分野が関連する社会問題について、その原因や解決についての調べ学習を行い、実際に社会でそうした問題の解決などに関わっている社会団体への訪問調査や職業人講話としてのウィンターセミナーを受講する。
- 【生徒の変容】
- こうした活動を通して生徒は、自らの興味関心のある学問分野が、現代社会における諸問題の解決に貢献していることを知ることができる。さらには、社会問題の解決に向けて仕事がどのような役割を有しているのかを実際に体験することで、仕事を持つ役割を自覚する。このことによって、希望する学問分野についての進路意識をより高めることができる。
- 2年次：「学問とつながる～大学を通して～」
- 【前半：アカデミックインターンシップへの参加】
- ◎ 1年次の調べ学習で形になってきた（関連する社会問題を考察し、その解決に貢献する手段として仕事の意義を再発見してきた）希望する学問分野について、より詳細に学問内容を調べ、焦点化していく。
 - ◎ 希望する学問分野が、大学で実際にどのように学ばれているのかを実際に体験することで実感する場として、アカデミックインターンシップに参加する。夏季休業を利用して3日間程度、生徒は大学生活を疑似体験する。
- 【生徒の変容】
- これらの活動を通して生徒は、自らの希望する学問分野について詳細な内容を知ることができるとともに、実際に大学でどのようなかたちで学ばれているのかを体験することで、これまでの進路学習の成果を確認できるとともに、今後

に向けてより高い進路意識をもって諸活動に取り組むことができるようになる。

【後半：「向陵セミナー」の受講から志望理由書の作成へ】

- ◎ 「向陵セミナー」においてより詳細となった希望学問分野に関わる大学関係者から話を聞き、さらに自分の希望する学問分野が実際に学べる大学がどこにあるのかを調べる。
- ◎ これまでの進路学習を総括し、「特定の学問分野を研究することを希望するに至った過程」、そして「その分野において、特に大学で学び、研究したいと思うこと」、さらに「希望学問分野を学ぶ場としての大学」、最期に「そうした学問分野を学ぶことによって将来の社会に対して果たしたい貢献と役割」についてまとめる。

【生徒の変容】

こうした活動を通して生徒は、自らが希望する学問分野についての知識をさらに蓄積し、数ある大学の中から、自分が適当だと思える大学を選択することが出来る。さらに、これまでの進路学習を総括することで、自分のキャリア発達状況を客観的に把握することが出来るようになり、自己肯定の感情を持って、日々の学習活動に前向きに取り組むことができるようになる。

- 3年次：「自分とつながる～課題学習を通して～」

【前半：「サクセスタイム」の実施】

- ◎ 自らの希望する学問分野について、その最先端の状況や現状、もしくはトピックスや課題について調べ学習を行う。なお、こうした調べ学習を行う際に、アカデミックインターンシップでお世話になった大学関係者に指導助言を求める場合もある。

【生徒の変容】

こうした活動を通して生徒は、大学で学ぼうとする内容について知識を獲得することで、自分が大学で学びたいことは何なのかをより明確に把握することができる。さらには、こうした活動を通して、より高い向学心と学習意欲を持って学習に取り組むことができるようになる。

【後半：「ケーススタディ」の実施】

- ◎ それぞれの学習結果に応じて自分が進学したいと考える大学の選択肢を想定する。その際、あくまで自らの希望する学問分野が学べる大学であることを前提とする。

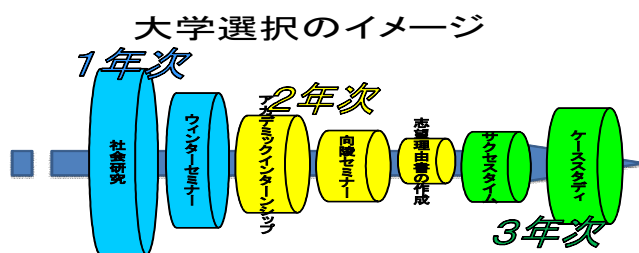
【生徒の変容】

こうした活動を通して生徒は、出願に関する様々な状況をシミュレーションしながら、自らの希望する進路実現に対して幅広い可能性を模索することで、自分の希望する学問分野への学習意欲を損なうことなく進学先を選択できるようになり、普段の学習活動に対してもより前向きに取り組むことができるようになる。

4) 備考

- グループでの学習形態

それぞれの学習場面において、生徒一人ひとりがグループ内で活動することによって、キャリア発達の度合いが比較的に進展していない生徒に対して他のグループ構成員がサポートするなど、生徒同士によりよい相互影響が見られると思われる。一人ひとりのキャリア発達が深化することが期待できると考える。さらには、生徒一人ひとりの人間関係形成能力や社会形成能力の発展に大きく貢献すると考える。



- 向陵プランにおける大学選択のイメージ

3年間の向陵プランを通して生徒は主に大学などの最終的な進路先を選択する。1年次の文理選択や社会研究からはじまって大学選択の幅を少しずつ狭めさせていく。そして2年次の志望理由書作成において一つに絞り込む。そして、その後はケーススタディなどで、逆に選択肢を広げさせる活動を行う。前提条件としては、こうすることで、自らの希望する進路実現に対して、幅広い可能性を模索することが

可能となる。

イ) 生徒の現状把握を目指したポートフォリオの導入に向けた調査研究について

1) 先行事例の調査研究

金沢工業大学で先行的に実践されているe-ポートフォリオについて視察・調査を行った。金沢工業大学では、普段の生活について記録した「修学ポートフォリオ」、高校までのキャリア発達度を調査した「キャリアポートフォリオ」、そして、各授業およびゼミにおいての到達度を記した「自己発達ポートフォリオ」の3つのポートフォリオを関連づけ展開していた。本校においても、参考になる事例であった。特に、「修学ポートフォリオ」における時期に応じた振り返りは、本校にとってもキャリア形成にとって効果的であろう。今後、「修学ポートフォリオ」と「キャリアポートフォリオ」のより有機的な結合を目指しながら、より効果的なポートフォリオのあり方を追求していきたい。

2) 期待される効果

【生徒変容の把握】

生徒の現状把握は、各種教育活動の場面において、目当てを設定する上で、もっとも基本的で重要な要素である。入学段階から卒業に至るまでの生徒一人ひとりのキャリア発達段階を把握することは、それぞれの時期に応じたキャリア教育を有効に展開するためには、欠かせないと考える。そうした把握する手段としてポートフォリオの導入が必要である。ポートフォリオを作成することによって、各生徒のキャリア発達段階がそれぞれの教育活動を経験することによってどのように変容したかというアウトカム評価を把握することができるのではないだろうか。

【各教育活動段階におけるPDCAの評価材料】

それぞれの教育活動において、その活動内容をポートフォリオで評価することによって、めあてと実際の活動状況の差異を把握し、PDCAにおけるチェックの場面において積極的に活用することにより、より効果的なPDCAサイクルが展開すると思われる。

3) 目指す導入の形式

1冊のA3ファイルを提供し、まず中学校時代に重ねてきたキャリア教育の成果をファイリングさせ、さらに中学校段階でのキャリア成熟度を確認できるワークシートを提出させ、同様にファイリングさせる。その後、本校で行われる諸々の進路学習に付随する資料やワークシート、進路意識の変容確認シートなどのファイリングを継続することを目的に、「キャリアポートフォリオ」の作成を計画し、さらにこうしたポートフォリオの作成と同時に、「学習の記録」をもとに、修学ポートフォリオの作成を計画する。また、e-ポートフォリオの開発を進めるためにも、校内ネットワークの構築を進めたい。

ウ) アカデミックインターンシップの導入に向けた調査研究について

1) アカデミックインターンシップの内容について

期日 原則として夏季休業中（3日間）

対象生徒 本校2学年生徒の希望者（グループ学習形態（各グループ5～7名））

2) 実施プログラムにおける基本的なコンセプトの明確化：「ラーニングシャドウ」

生徒が影のように、教授・助手・大学生や大学院生などについてまわり、大学院生らが大学において一生懸命、研究活動をしている姿を通して、大学における研究活動の緊張感や熱意を感じ、さらには、研究活動を手伝いながら、大学における研究活動の楽しさとやりがい、さらには厳しさを実体験するもの。

職場等で行われるインターンシップの場合は、ジョブシャドウと呼ぶ。企業の社員一人に数時間シャドウ（影）のごとくついてまわり、社員が仕事をする姿を通して会議の熱気や緊張感を感じ、一部の仕事も手伝いながら、仕事の厳しさを肌身で体験する。

3) 期待される生徒像

① 高校での学習と大学における研究活動との関係についての生徒の理解の促進

大学などの現場における実際的な研究活動における知識や技術・技能に触れることが可能となるとともに、学校における学習と大学における研究活動の関係について、生徒の理解を促進し、学習意欲を喚起するきっかけとなる。

② 生徒の自己再発見の支援

大学などの現場に身を置き、研究活動などに従事する体験は、生徒が自らの役割を認識し、それを通して自己の存在意義を実感する機会となり、自己有用感の高揚に資するものである。このことは、生徒に自信を持たせ、学習意欲を高める効果が期待できる。

③ 主体的な大学選択の能力の育成

生徒が自己の学問に対する適性や将来設計を考える契機となり、主体的な大学選択の能力や高い学習意識の育成が促進され、大学卒業後の生き方を意識し、将来を見据えた大学選択が可能となる。

エ) 大学視察について

- 1) 形態：教員2～3名1チームとして大学への視察を行う。
- 2) 実施時期：考査期間中
- 3) 目的

◎ 進学希望大学の視察・研究

教員数名のグループで大学を訪問し研究内容を理解し、その成果の共有化を図り、進学希望大学の状況の的確な把握により指導の充実に資する。もって、見通しをもって選び主体的に自己実現する力の育成を図る。具体には、各大学や研究施設の内容をファイリングし、その大学を希望する生徒の進路選択の一助とする。または、該当教員が直接生徒と面談し、大学での研究内容を説明する。そのことで、生徒の進路意識の高揚を図るものである。

◎ アカデミックインターンシップの研究・開発

在仙や近県の大学での、長期休業を利用した実際の講義や研究の体験や実践をアカデミック・インターンシップの実現に向け、企画までの研究・開発の充実に資する。さらに、その実現により、将来の希望と探求的に関わり、その実現への意欲を高め日々の学習と関連付けようとする力の育成を図る。

4) 具体的内容および成果

◎ 山形大学農学部

山形大学農学部が行っている大学1年生に対する初期指導が大変充実している点や、この学部が有している他大学の農学部との違いについて十分理解できた。また、アカデミックインターンシップについて前向きな評価をして頂き、今後の実現に向けて期待を抱かせるものであった。

◎ 弘前大学農学部

弘前大学の農学部では他学部との連繋が図られており、より先進的な取り組みがなされていた。アカデミックインターンシップについては、地理的な制約もあり、実現に向けては難しいと思われるが、高校段階での取組として、興味を持っていただいた。

◎ 宮城大学食産業学部

県内の公立大学ということもあり、宮城大学の食産業学部ではアカデミックインターンシップについて、前向きに検討して頂くこととなった。特に時期についての提案は、本校としても都合のいいものであり、その実現に大いに期待が持てる。また、食産業学部で行われている研究内容についても、非常に丁寧な説明をして頂き、此方の大学について詳しく知ることができたと考えている。

◎ 秋田県立大学生物資源科学部

秋田県立大学の生物資源科学部については、その初期指導の充実ぶりが目を惹いた。また、少人数でのゼミや研究室など、丁寧な指導に関しての強い自覚があると感じられた。アカデミックインターンシップについては、弘前大学と同様に地理的制約があるものの、出前授業などの要請には積極的に対応していきたいとのことであった。

◎ 岩手大学農学部

岩手大学の農学部では、3つの学部について詳しく説明をいただいた。特に他大学との差別化には力を入れているようだった。また、アカデミックインターンシップについては、強い興味関心を持ってもらった。岩手大学全体としては分からないが、農学部としては実現が可能だという話しであった。今後の展開に期待したい。

◎ 金沢工業大学

こちらの大学については、アカデミックインターンシップや大学の状況の的確な把握とは別に、ポートフォリオについての調査のために視察した。その詳細については、イ)の「ポートフォリオの導入に向けた視察・調査」の項目で既述してあるので、そちらを参考にして頂きたい。

オ) 生徒の発達段階調査及び卒業生動向調査についての分析

11月には今回の進路指導総合推進事業と関連して、宮城県教育研修センター作成の発達段階調査を実施した。全学年の生徒(600名)について実施したが、ここでは「特に評価の低い項目」と「学年の進行に従って評価が高まっている項目」の2点をあげたい。なお、各項目は5点満点で記載している。

特に評価の低い項目（番号は質問番号）

27 地域や社会の一員として、地域の行事やボランティア活動に自主的に参加している。（全体 2.08）

12 自分の長所を理解し、長所を伸ばそうとしている。（全体 2.27）

学年の進行に従って評価が高まっている項目

8 心身の健康を考え、規則正しい生活をしている。

1年 2.62 2年 2.64 3年 2.73

14 社会で起きている出来事に関心があり、改善策を考えたりしている。

1年 2.48 2年 2.56 3年 2.72

15 課題や疑問について解決するために、書籍やインターネットなどでの確に情報を集めている。

1年 2.47 2年 2.62 3年 2.72

21 希望する進路に向けて計画を立て、自ら進んで取り組んでいる。

1年 2.58 2年 2.65 3年 2.70

25 進路に関する情報を様々な手段で収集、整理し、活用することができる。

1年 2.61 2年 2.66 3年 2.76

この結果を見ると、本校では、向陵プランを中心としたキャリア教育によって学年が進むに従って自ら進路決定に向けて取り組む姿勢が形成されていることがわかる。

11月から1月にかけて、平成21年度の本校卒業生に対して宮城県教育委員会から示された形式による卒業生動向調査を実施した。

1 就業・通学状況

ア 就業・通学している（予備校含む） 119名

イ 退職・退学した

ウ アルバイトをしている 1名

エ 就業・通学していない

オ その他 1名

2 高校におけるキャリア教育への評価

ア 高校で学んだことは、ものの見方・考え方に役立ちましたか。

イ 高校で学んだことは、将来の職業を考える上で役立ちましたか。

ウ 高校で学んだことは、人生を考える上で役立ちましたか。

エ 高校で学んだことは、他者理解や自己理解を深めることに役立ちましたか。

オ 高校で学んだことで、学校や社会において自分の果たすべき役割を自覚できましたか。

☆以上の質問の回答について以下のように点数をつけ、項目ごとに平均をとって評価
とてもそう思う（4点）そう思う（3点）あまりそう思わない（2点）
全くそう思わない（1点）

本校の結果（回答121名） ア（3.4点）イ（3.1点）ウ（3.2点）

エ（3.4点）オ（2.9点）

この結果を見ると、本校の向陵プランを中心とした取組が、キャリア教育推進において一定の成果をあげていることがわかる。

カ) 現1年生における進捗状況

本校進路指導の柱である「向陵プラン」では、「社会とつながる」「学問とつながる」「自分とつながる」をキーワードに、21世紀の社会に貢献できる人材の育成をめざして指導を行っている。第1学年では特に「社会とつながる」ための活動に力を入れており、その際留意したのは、主に次の二点である。

1つ目には、関心の近い者同士で作ったグループ単位で行動させることにより、活発な意見交換や積極的な行動を促し、また、周囲と協調しての活動を経験させること。そして2つ目には、「ある職業に就くためにどうすればよいか」や「ある大学に入るにはどうしたらよいか」ということではなく、「社会ではどんな問題が起こっているか」や「その問題を解決する方法として、学問をどう活用できるか」ということを考えさせて行動させることである。

分野	教育学	
社会問題	理教離れについて	
訪問場所	仙台市教育センター	
メンバー氏名	1138番 氏名 眞山楓波	1236番 氏名 三浦夏生
	1437番 氏名 野口なつ果	1501番 氏名 阿部一貴
	1503番 氏名 伊藤勇馬	番 氏名
	番 氏名	番 氏名

私たちの班は「理教離れ」について調べました。今、世間では「理教離れ」が問題になっています。なぜこの問題が起きるのか。どのような解決策があるのか。疑問を感じたため「仙台市教育センター」でお話しを伺ってきました。

- Q.なぜ理教離れがおきるのか。
 A.勉強や実験をテスト、受験のためと考え、本来もつ楽しんでやおもしろさを感じず、「わがらひい」で片付けてしまうため。

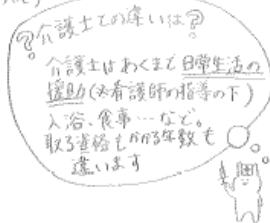
分野	看護分野	
社会問題	看護師不足	
訪問場所	日赤病院	
メンバー氏名	1131番 氏名 高橋佳奈子	番 氏名
	1140番 氏名 渡邊 綾乃	番 氏名
	1330番 氏名 佐々木 里奈	番 氏名
	1331番 氏名 飯藤 沙都	番 氏名
	1438番 氏名 保坂 奈穂	番 氏名

看護師の種類と説明

保健師(地域の健康増進)・事業所・学校の看護教諭・特定看護師
 エムホーム・方言門看護ステーション・認定看護師・専門看護師
 助産師(医師の指導は別物で、独立が可能)

仕事

「健康を増進させる」お仕事です。
 保健師・助産師・看護師法により
 心療補助・療養士の世話をすることが
 認められています。
 ※特定看護師は例外! 診療などが行える。



なぜ看護師が不足しているの?

※病院には患者数に合わせた看護師の基準がある。
 ①患者10人:看護師1人 → ②17人:1人の体制となり、③が病院が増えた。
 ※色んな所で看護師不足!!! → 看護師がもっと活躍して
 ※病院が増えたら、基準も変わる (0.522に... (0.522) → ①)

さらには仕事の意義や学問の意義を再確認させる事を目標としたが、中には大学の研究室を訪問し、社会問題の解決に希望する学問分野がどのような関わりを持つのかを調査したグループもあった。これは、今後2年次で行うアカデミックインターンシップを先取りするような活動であり、こちらとしても生徒の主体的で積極的な活動ぶりは予想を超えるものであり、まさに嬉しい誤算であると言える。

「ある大学に入るにはどうしたらよいか」ということではなく、「社会ではどんな問題が起こっているか」や「その問題を解決する方法として、学問をどう活用できるか」ということを考えさせて行動させることである。

前期にはグループごとに社会の関心事をテーマとして選んで調査・発表する活動を行わせ、社会の諸問題についての知識を蓄積させた。それを踏まえて後期には、多くの大学から先生方をお招きして講座を開く「向陵セミナー」を実施し、学問が社会にどう貢献しているのかを考えさせた。その後、関心のある社会問題について、実際に企業等を訪れてインタビューを行う「実地調査」を行わせることで、知識として学んだことを自分の目で確認させた。「実地調査」では自分たち自身で予約を取り、訪問させることで、外部の方が時間を割いてお話しをくださることがいかに貴重なことかということも経験させた。

実際に社会で活躍している人々に話を聞き、社会問題への関心をより深めさせ、

燃料電池のメリットとデメリット

～実用化するにあたって～

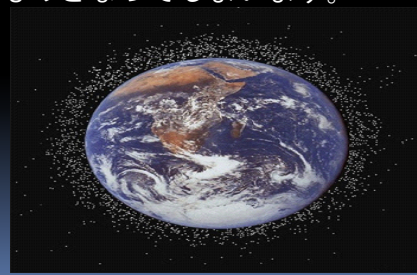
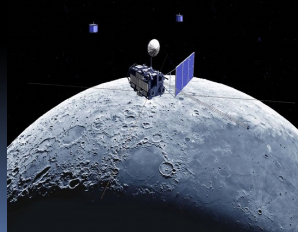
これらの活動を終えた上で実施したのが、外部から社会人をお招きしたの「ウィンターセミナー」である。講師は寺の坊守、自衛官、ウェディングプランナーなど、様々な職業に携わっている23名の社会人。講師には事前に「自分で人生を選び取って生きている社会人の『熱さ』を生徒に伝えていただきたい」ということを伝えてあり、「この職業にどうつくか」ということではなく、「社会の中で自分を持って生きるとはどういうことか」が生徒に伝わるようにお話ししていただくことをお願いした。

ウィンターセミナー後の生徒の感想には、「社会に関する画一的な考え方（勉強をしていけばいい人生が送れる、〇〇の職業につけばいい、など）が崩れた。もっと自由に発想していいのだということが分かった」というものや、「生き生きと仕事のことを語る講師の方のお話を聞いて、自分の夢も実現したいと思った」といった前向きな意見が多かった。「学校で教えていることだけが全てではないと思った」という意見もあったが、これは学校側にとってむしろ歓迎すべき意識の変化だと考える。学校で行っていることを再認識し、そこから自分がやるべきことを選択するという意識こそが、主体的な活動に必要な不可欠なものだからである。

当初、進路意識に乏しかった生徒たちも、これまでの1年に及ぶ向陵プランを経験する中で、少しずつ自らの希望進路を形にできてきているようだ。進路学習に対する主体的な姿勢も見られ、これは他の学習活動にもよい影響を与えていると思われる。

宇宙の社会問題 1

スペースデブリと呼ばれる宇宙ゴミが現在使用されている人工衛星や国際宇宙ステーションの動きや探索を妨害していることが問題になっています。このスペースデブリが増え続けると新たな宇宙開発が難しいものとなってしまいます。



b. 成果の普及に関する取組

今後各種校内研修会などで、今回の成果について、教員間に普及を図るとともに、リーフレットや冊子を作成し、その成果について、保護者など関係各位への周知徹底をはかりたい。それとともに、今後はアカデミックインターンシップの実現に向けて精力的に活動するとともに、ポートフォリオの導入について取り組んでいくことになる。金沢工業大学でも、ポートフォリオについての大変貴重な話を聞かせていただいた。特に、学習習慣や生活習慣に関するポートフォリオとキャリア発達におけるポートフォリオを分けて作成し、その両者を有機的に関連させながら、全体として一つのPDCAサイクルを展開させることの視点は、大変参考になった。本校でも、学習状況調査として「学習の記録」を実施しており、十分定着していたのだが、今後は、そうした活動をポートフォリオの一環として捉え直し、さらにはキャリアポートフォリオの作成を進め、そうしたキャリアポートフォリオと関連させながら総合的なキャリア教育の推進に力を入れたい。また、同大学においては、ネットワークシステムが完備されており、構内LANが充実していた。学生は、各自の学生ポータルを有しており、各種ポートフォリオの作成や大学教員との連絡もすべてこのシステムに従って行っていた。よって、本校においても、今後、コンピューターシステム、ネットワークシステムの整備は欠かせないものとなるであろう。このことが来年度に向けた活動に一つの柱になるのではないだろうか。

従って、今後の課題を考えたときに、大きな柱は3つあると考える。一つは向陵プランの捉え直しである。これは「進路シラバス」の捉え直しを中心に行うべきものと考え、その中で特に、2年次におけるアカデミックインターンシップの実施に向けた取組が重要であると考え。むろん、大学側の状況も踏まえながら、実現に向けて着実に進めていきたいと考える。また、2つ目としてポートフォリオの導入があげられる。これまで行っていた「学習の記録」を活用し、さらにはキャリアポートフォリオの作成が今後の課題であろう。また、こうしたポートフォリオを教育課程上に組み込むことも重要である。その際、評価手段としてのポートフォリオという位置づけで、向陵プランの評価に向けた材料としてポートフォリオを活用していきたい。最後に3つ目として、校内ネットワークの整備があげられる。むろん、生徒用のネットワークシステムの構築にはなお時間がかかると思われるが、まずは教員間などでのシステム構築を目指したい。幸い、今回キャリア教育の視点から捉え直した向陵プランを本格的に導入した現1年生においては、実地調査での大学研究室への訪問など、将来像構築に向けて意欲的な姿勢が見られる。しかし、普通科進学校におけるキャリア教育の一つの在り方として、向山高校が掲げる「実現力」育成を目指した活動はこれからが本番である。